

こどもたちと織り上げる

アタラシイ カタチ

新しい形

Vol.17
2026 夏



やまとこども園 mimi
夏の泥んこ遊び

園庭の砂場に水を流すと、
「わあ、温泉みたい!」と
寝転がった4歳児たち。
友だちと発想を広げています。



社会福祉法人
ア・タ・ラ・シ・イ
カ・タ・チ

<https://atarashii-katachi.or.jp>

やまとこども園 やまとこども園 mimi 昭和やまとこども園 鶴舞やまとこども園
やまとこども園 hug やまとこども園 chouchou 西大寺北こども園 三笠保育園

国際バカロレア IBってなに？

当法人が進めている世界標準の教育プログラム「IB教育」。子どもの好奇心や探究心を刺激する内容で、楽しみながら将来に役立つさまざまなスキルを身につけられます。



季節の違いってこんな感じかな♪

「なんだろう？」
気づき、
興味をもつ

「もっと知りたい！」
新たな疑問や
探究へつながる

「やってみよう！」
試し、
探究する

「伝えたい！」
共有・表現する

「わかった！」
発見し、自分なりに
意味づける

自分の夢に
向かって頑張る！



遊びのなかで、生涯にわたる“学びの土台”を育む

なぜ「アタラシイカタチ」が存在するのか

社会福祉法人アタラシイカタチ理事長 生田 宏史

少子化や価値観の多様化、グローバル化などにより、「いい学校に入って安定した企業に就職する」という道筋では通用しない社会へと移り変わりつつあります。自然災害や地球温暖化、食糧問題、戦争・紛争などの地政学リスクによる将来への不安が高まる一方で、生成AIによる仕事の自動化も急速に進んでいます。未来の予想が難しく、「正解のない時代」に入った今、自分自身の判断と選択で生き抜く力が必要です。これからの子どもたちに求められる力は、知識だけを頼りにして「正解を選ぶ力」ではなく、知識と思考力を駆使して「自分なりの問いを立て、課題を探し、行動していく力」です。

け、仲間と協力しながら形にしていける力を伸ばします。混沌とした時代が訪れても、どのような困難に直面しても、自分で乗り越えていける力を備えた子どもを育てるために、「奈良から日本の教育を変える」ことが私たちの役割です。

当法人が進める国際教育の一環として、「ニュージールランド親子留学」がスタートしました。ニュージールランドの小学校では、Inquiry-Based Learning（探究型学習）や子ども主体の授業、グループ活動（総合型学習）、多文化教育を実践し、子ども一人ひとりを大事にする「個別最適な学び」と「協働的な学び」が保障されています。これは日本の学習指導要領でも以前から重要視されていることですが、日本は未だに知識取得とテスト中心、一斉授業、先生＝指導者といった教育が多くの学校で行われている、子どもは受け身になりや

すい傾向があります。

ニュージールランドでは「答えを教える」のではなく、正解がひとつではない問題について「自分で考える」教育が行われています。テストの結果よりもプロセスを重視し、協調性（チームワーク）や表現力（スピーチ・発表）、自己管理能力、問題解決力を評価します。私たちが取り組んでいる国際バカロレア（IB）のPYP（プライマリー・イヤーズ・プログラム）とよく似ています。PYPは自分を取り巻く社会における身近なできごとをテーマにし、自分なりの問いを立てて考え、課題を見つけて行動する力を養うことを大切にしています。

ニュージールランドの学校で目にした子ども主体のグループ活動のなかに、私たちが目指す教育のカタチがありました。

奈良県は未活用の県有地にインターナショナルスクールを

誘致する方針を発表しました。英語を母国語とする国に本校を置き、IBなど国際的に評価された教育を実践する学校の誘致を想定しているとのこと。県内の国際教育を促進し、世界で活躍する人材を県から輩出することに加え、若い世代の移住を含めた地域振興も期待しているそうです。

私たちがこれまで取り組んできたグローバルスタンダードの教育が、ようやく注目を集めることとなりました。インターナショナルスクールの開設という次のフェーズに進むためにも、IB教育をはじめ、各園で実践している「子ども主体の保育」と「子どもの探究心を育む保育」は、当法人の重要な教育・保育方針として位置づけていきます。「奈良から日本の教育が変わる」。その瞬間をみなさまと共有できる日を楽しみにしています。

きれいな水がある場所では、おいしいお米ができることを知った子どもたち。「なんで水がきれいなんだろう？」と考え、山に雪が積もり、その湧水を使って米づくりが行われていることを探究。そして、米どころでは団子が名産品になっていることを知りました。



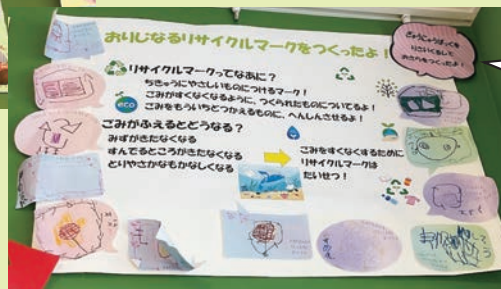
夏まつりでは、ご当地団子を作って提供し、自然と食べ物つなかりを体感。

園内で水探し！



2 「調べてみよう！」 探究する

子どもたちが主体的に園内を巡り、どこに水があるのかを探索。また、水の使い方を知る方法のひとつとして、作るうえで水が必要な団子についての調べ学習も。海や川をゴミで汚さないために、リサイクルマークに関する活動も行いました。



園内と家庭でリサイクルマークを探したあと、自分だけのマークをデザイン♪

水、大事にしよう！

ゴミもちゃんと分ける！

水が汚れると大変なんだ！

ごはんも作れない！

水がないと野菜が育たない！

3 「わかった！」 気づく

探究をさらに深め、学んだことを周囲に伝えるために表現活動へと展開！

IBのファンです！

保護者の声

言葉や行動によい変化が見られます

IBの探究型学習は、家庭での子どもの様子にも影響を与えているとのこと。以下は保護者から寄せられた声です。

- さまざまな場面で自ら行動するようになりました。
- 運動会をきっかけに国旗に興味をもったわが子。オリジナルのクイズをつくるなど、探究心が育まれていると実感。
- 積極的に発言するようになりました。自分の意見を価値あるもの

だと感じてくれているようで、うれしく思います。

●Inquirers (探究する人) や Knowledgeable (知識のある人) をはじめとするIBの学習者像について、子どもが教えてくれます。この経験が自信につながっているようです。

IB教育をポジティブに捉える方が多く、「小学校でもIB教育を継続できるとよい」と強く望む保護者もいます。



子どもたちの「なんで？」「やってみよう！」という学びの過程や成長を視覚的に伝えた「探究ウォール」。保護者の目にも留まり、探究活動を家庭に広げるきっかけに。

実例

IBってこんな学び方／

水ってなんで大事なの？

昨年度、やまとこども園 mimi の4歳児たちは、IBが設定するテーマのなかから「この地球を共有するということ」を選び、一年を通して水に着目した探究型学習に取り組みました。考える力やコミュニケーションスキルが養われた活動の一部をご紹介します。

1 「なんでだろう？」 きっかけ

まずはペットボトルに入れた雨水・田んぼの水・水道水・石けん水を観察し、色やにおい、感触を比較。「この水は飲めると思う？」「魚は生きられる？」などの問いに対して、気づいたことを友だちと共有しながら話し合いました。比べて考える経験は、思考スキルの発達を促します。



外の水は汚れているのに、なんで魚は生きられるの？

どんな色かな？

雨の水と田んぼの水は、なんで色が違うの？

グループごとに話し合ったことを、みんなの前で発表しました。大人の助けは少し借りる程度で、いろいろな水の違いについて自分の言葉で詳しく説明した子どもたち。保育教諭が「雨水や田んぼの水は川とつながっているんだよ」と補足し、水の循環についての知識も得ました。



きれいで安全な水は水道水だけ！

汚れた水を飲むと体を壊すから、生き物は水道水でしか生きられないと思う。

田んぼで生きている魚を見たことがあるよ。

田んぼの水と水道水は、においも違うね。



4 試す・表現する「やってみよう！」

自ら問いを立て、探究しながら答えを見つけ、仲間と協力して形づくる！

作品展

探究したことを形にし、異年齢児に発表！責任感が芽生え、「水を大切にしよう」と伝えました。

みんなできれいな川と汚れた川のジオラマを製作し、生き物の作品を入れたときの生き物の様子を分析。作品展で展示して、異年齢児にきれいな川を守るために自分たちにできることについて説明すると、年少クラスの子どもたちも興味津々に。「どうしたらきれいになる？」「ゴミを捨てなかったらいい？」などと友だちと対話しながら考えを広げました。

汚れた川の様子や流れ込むゴミを、絵の具や廃材で表現したよ！



汚れた川のジオラマ。生き物の作品を入れると、「ゴミがあるから苦しそう」「助けたい!」と子どもたち。



きれいな川のジオラマでは、「魚が動けるよ」と喜び合う姿が！

ポスター作り

園のみんなで水を大切にするために、クラス全員で意見を出し合ってポスターを製作して掲示。今では水のムダ使いに気をつけたり、「ゴミを拾ってくれてありがとう」と声をかけたりする様子が見られます。



5「もっと知りたい!」次の探究へ

自分で考えて行動する力を育成

文部科学省の推進もあり、IB教育を導入する学校が年々増えています。IBは大学入試でも活用され、受験に有利に働くと考えるため、IB認定校の中学校や高校は人気を集めています。

3～12歳向けのプログラム・PYPでは、国際教育に必要なテーマを取り扱い、探究を通して言語・社会・算数・芸術・理科・体育の内容を学習。16歳以上のIBプログラムのほとんどは英語をはじめとする外国語で実施しますが、PYPはどの言語でも可能です。当法人のことも園では、人とながためツールの英語を付加言語として取り入れ、子どもの問いに基づいて活動を展開するようにしています。

主体性があると探究したくなり、探究すると主体性がさらに伸びるものです。従って、大人の都合で子どもを動かしたり、正解を教えずたりしないように心がけています。考えて行動する力をはじめ、自己肯定感や思いやりの心などの非認知能力も育むIB教育。活動後に入念な振り返りを重ねることで保育教諭たちのスキルも向上し、「次はこうしてみよう」と前向きに取り組んでいます。

社会福祉法人アタラシイカタチ 事業計画

1 事業目標

①2本の柱「保育を楽しむ」「子どもファースト」への取り組み

令和8年度は運営する7つの子ども園と1つの保育園のすべての園で、子ども主体の保育環境を整え、探究心を育む保育を行います。子ども遊びや育ちによって大人たちの交流も生まれ、園全体が成長していく「アタラシイカタチ」の文化を保護者とともに織り上げます。そのためには、法人の理念や目的を職員の隅々まで届け、職員の声に耳を傾けることを大切にします。

多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやり、に富んだ若者を育成するには、乳幼児期から子どもの人権を尊重した保育を進めなければなりません。そして、保育者が保育を楽しむ園では、子どもの自己肯定感や自尊心が育ちます。運営するすべての園で「保育を楽しむ」「子どもファースト」を宣言し、職員はこれを守り、それぞれ役割を果たします。

②地域における公益的な取り組み

社会福祉法人としての公益性に鑑み、日常生活または社会生活上の支援を必要とする人に対して、創意工夫による多様な地域貢献活動を行います。地域のことも食堂運営者に対して、運営上の理由で使用できなかった給食食材やおやつを提供します。

③経営組織のガバナンスの強化

組織においての重要事項の意思決定を迅速化し、決定した事柄を執行する役割を明確化します。また、業務執行プロセスの監視について整理し、健全で公正な法人運営が担保される仕組みを検討します。法人の業務執行の強化を目的に常勤理事2名を増員し、法人本部にて保育の質の向上を担当して取り組みを行います。

④事業運営の透明性の向上

公益性の高い法人として事業運営の透明性の確保を図るため、さまざまな方法を用いて広く国民に対する説明責任を果たします。

⑤財務規律の強化

社会福祉法人の非営利性、公益性に鑑み、特別の利益供与や高額な役員報酬等を禁止します。外部監査を実施することで、事業運営の透明性や財務情報の信頼性を担保し、余剰金については社会福祉事業等へ積極的に再投資します。

2 行動計画

①新たな成長戦略(中期計画)

保育事業を取り巻く環境は、保育制度の規制緩和により多様な事業主体に参入を促すことで、都市部を中心に待機児童の解消は一定の成果を得て終わりを迎えると考えます。奈良県では、大阪や京都と隣接する地域以外では、保育ニーズは緩やかに減少し、山間部地域では急速な過疎化が進行しています。

行政では公立の幼保施設の統合や民間移管が徐々に進んでいます。今後は民間移管施設の公募への参加は当面見合わせることにします。今後の金利の上昇や物価高騰に備えて、借入金返済や内部留保の確保を優先的に実施したうえで、新たな投資の機会を探り、事業の多角化を進めます。なお、令和9年4月に橿原北やまこども園の開園、令和9～10年度にやまこども園hugの増改築工事の実施を予定しています。

②新たな成長戦略(長期計画)

グローバルな視点で幼児教育を実践することを目的に、国際バカロレア(IB)が認定する3～12歳を対象にした国際教育プログラムPYPの認定校になることを目指します。IBの使命に共鳴し、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやり、に富んだ子どもを育成します。PYP認定校となった暁には、国際教育の実践を通してニュージージランドでの幼稚園の開設、国内でのインターナショナルスクールの開設、小学校(IB認定校)の開設を新たな目標とし、IBの理念のもと、世界で活躍できるグローバルな子どもや教育者を育成します。

まずは、やまこども園、やまこども園mim、鶴舞やまこども園、西大寺北こども園、やまこども園chouchouの5園にてPYP認定校を目指します。また、ニュージージランド・マウンテンタウン・ガヌイの小学校への親子留学も実施します。

③多様な人材の活用

法人の持続的成長のためには、保育事業の安定的な運営基盤を強化し、

それを維持・発展させていく人材が必要で、近年、目まぐるしく変化する保育施策のなかで持続的に成長していくには、新たな事業を担う人材の育成や採用に取り組む、幅広い業務経験や得意分野での能力の発揮を促します。国際教育事業に関連する外国人講師を採用し、リファラル採用制度と就職支援金制度も導入します。

④教育・保育内容の充実

乳児期は人が一生を通して育まれる人格形成において、一番大切な土台がつくられる時期です。この土台がしっかりとつくりだされていることが、幼児期における「子ども主体の保育」や「探究的な学び」につながり、子どもたちの活動の幅は一気に広がります。乳児期の子どもに安全で安心な環境を提供するなかで、信頼できる保育者との関わりを通して成長し、主体性や自己肯定感を高めることが大切だと考えます。

そして、幼児期は遊びや生活のなかで、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿について、保育者と子どもが思いを共有していくことでイメージを膨らませます。主体的に関わる探究的な活動を通して、幼児期の遊びや育ちを豊かにしていくことが大切です。

保育者は子どもの気持ちに寄り添い、保育を柔軟に変化させるスキルに身につけます。子どもの状況に応じて日々保育をアップデートする、主体的に保育に取り組む人材を育てます。そのために、保育スーパーバイザーによる指導や、保育の専門家から理論・実践を学ぶワークショップを実施します。また、一般参加型の公開保育と法人内の公開保育も開催します。

⑤ブランディングによる価値の向上

法人の存在意義や目指す姿を明確に示し、その意義が生み出す価値を求めている人々に想起させることで、他法人とは違う独自の魅力を発信する取り組みを確立します。インスタグラムやHPを活用して園独自の魅力を発信し、職員採用や入園情報ボランティアの募集など、さまざまな情報を提供します。法人広報誌と法人事業報告集を発行し、法人独自の公式LINEを開設し、保育実習生や保育ボランティアに向けて園の魅力や保育教諭・保育士募集などの情報を発信し、採用につなげます。また、将来を見据えて社会問題や環境問題を意識し、保育事業を通してSDGsに取り組みます。

⑥法人機能の強化

施設ごとの管理運営方法から、統一した管理運営方法を取り入れるために、法人本部機能の集約と強化を進めます。決算の早期化、効率的な人材配置と人材育成、財務会計から管理会計への転換を図り、より迅速で正確な経営判断を行い、法人を活性化します。

⑦子どもの権利の保障

子どもの権利条約に基づき、子どもが大人と同じく、ひとりの人間としてもっている権利を認め、大人へと成長する過程の弱い立場にある子どもの権利を守ります。

⑧職場環境の改善

職員にとって働きやすい職場にするため、労働条件やメンタルヘルス対策、ワークライフバランスの確立など、職場環境の改善に取り組み、生産性と定着率の向上を目指します。職員の心の健康の保持増進を目的に、ストレスチェックも実施します。

食べるって 楽しいね。

今日のひと口、ミライの元氣

第1回

よく噛んで食べる

保護者のみなさんは忙しい毎日のなかでも、「きちんと栄養を摂ってもらいたい」「好き嫌いが多くて心配……」といった思いや悩みを抱え、お子さんの食事に試行錯誤していることと思います。まずお伝えしたいのは、難しいことはしなくて大丈夫だということ。「よく噛んで食べること」からはじめてみるのはいかがでしょうか。

よく噛むことは腸にやさしい食べ方の第一歩で、腸内環境を整える土台づくりにつながります。しっかりと噛んで細かくなつた食べ物は、消化酵素が含まれる唾液と混ざって消化しやすい状態になり、腸での分解・吸収もスムーズに。善玉菌のエサとなる食物繊維も適度に分解され、腸内細菌のバランスが整いやすくなります。さらに、噛んだときの刺激は脳に伝わり、

当法人の園の給食には、噛むたびにやさしい味が口に広がるパンや、食感を残して食べやすい大きさにカットした野菜料理などが登場。和やかな雰囲気の中で、おいしく食べています。



自律神経を通じて胃腸の働きを活発にするという効果も。逆に食べ物を噛まないまま飲み込むと、胃や腸に負担がかかり、腸内には悪玉菌が増えて便秘やおなら、お腹の張りの原因に。栄養の吸収率も下がってしまいます。

無理なく子どもの咀嚼を促すには、少し歯ごたえのある食材を取り入れて、ひと口の量を少なめにしましょう。急かさずに楽しく食べられる雰囲気をつくり、「カミカミだね」などと声をかけるのもオススメです。

ところで、味噌や塩麹、甘酒などの発酵食品には、腸内環境の改善に役立つ酵素や善玉菌、代謝産物などが含まれますが、そのまま腸に届けばよいというわけではありません。

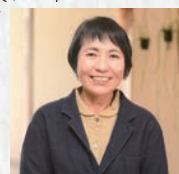
発酵食品もよく噛むことで体内に吸収しやすい状態にな

り、その効果を最大限に得ることができま。発酵食品を摂っても未消化のままなら、腸内は悪玉菌優位になりやすいと言えます。

例えるなら、咀嚼は「土を耕すこと」、発酵食品は「体によい種」。どんなよい種でも土がかたいままだと、植物は育ちにくいです。よく噛む食べ方で腸内環境を整えれば、発酵食品の力も活きてくるのです。

子どもの心身は日々の食事によって、少しずつつくられます。今日食べたものがすぐに目に見える変化となつてあらわれるわけはありませんが、毎日のひと口の積み重ねが5年後、10年後の体調や心の安定につながっていきます。頑張りすぎず、でも少しだけ意識して、毎日の子どもとの食卓を大切にしていきたいものですね。

教えてくれた方 /



水野 ゆか先生

社会福祉法人アタラシイカタチ 保育スーパーバイザー。奈良県内のこども園にて15年、園長を経験。乳児保育のアドバイザーとして活躍する一方で、自ら発酵食中心の健康生活を実践するなど、食育にも造詣が深い。

現在、社会福祉法人 アタラシイカタチでは一緒に働く仲間を募集しています。新卒、キャリア採用(転職・復職をご検討の方)、実習、ボランティア、施設見学の受付を行っておりますので、右記ホームページのお問い合わせフォームもしくはお電話にてお気軽にお問い合わせください。

社会福祉法人 アタラシイカタチ <https://atarashii-katachi.or.jp>

〒639-1123 奈良県大和郡山市筒井町 145-1
やまとこども園内

採用担当：やまとこども園 chouchou 園長 木下
(TEL. 0743-59-4141)



HP



Instagram